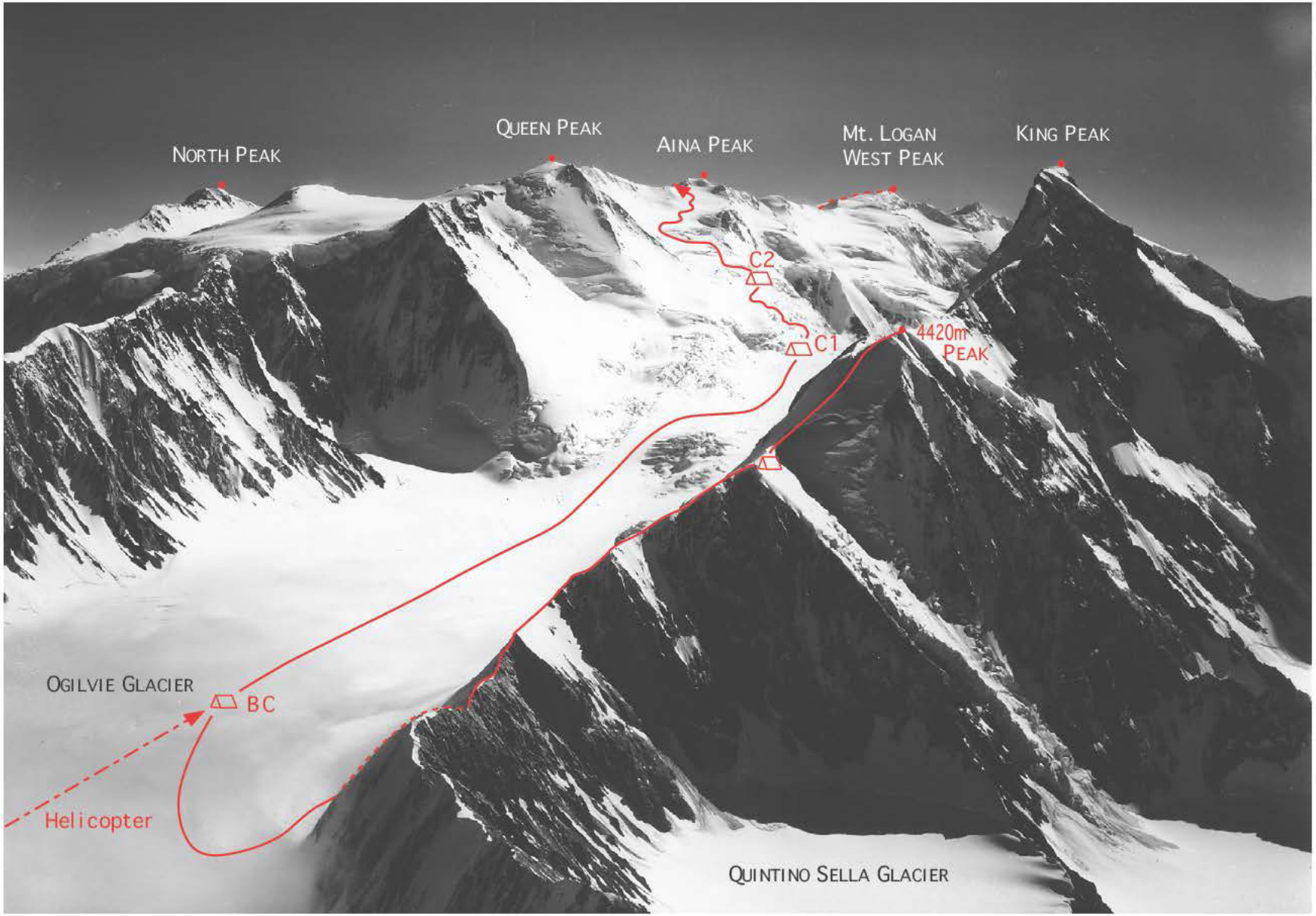
1973 Mt. Logan Ski Expedition

30th Anniversary Memorial Edition



スキー滑降ルート　山頂より北側の高所台地を滑り、いったんアイナピークの肩を越え、西陵の南側斜面を通り、
キングピークから派生する尾根にはさまれたオギルビー氷河までの標高差 3000 メートル、滑降距離約 30 キロメートルのルートを見いだした。

Photo: ©Bradford Washburn

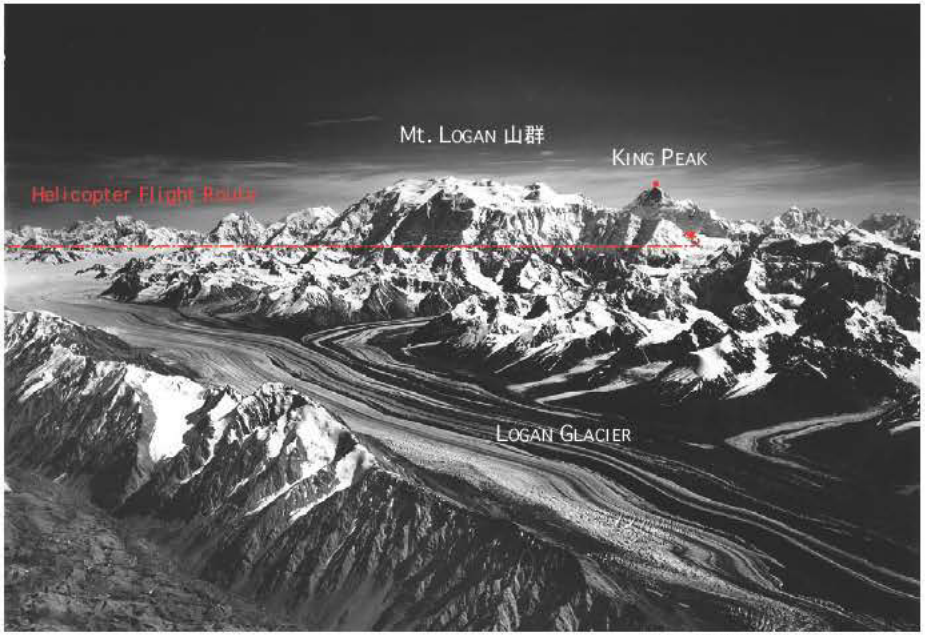


Photo: ©Bradford Washburn

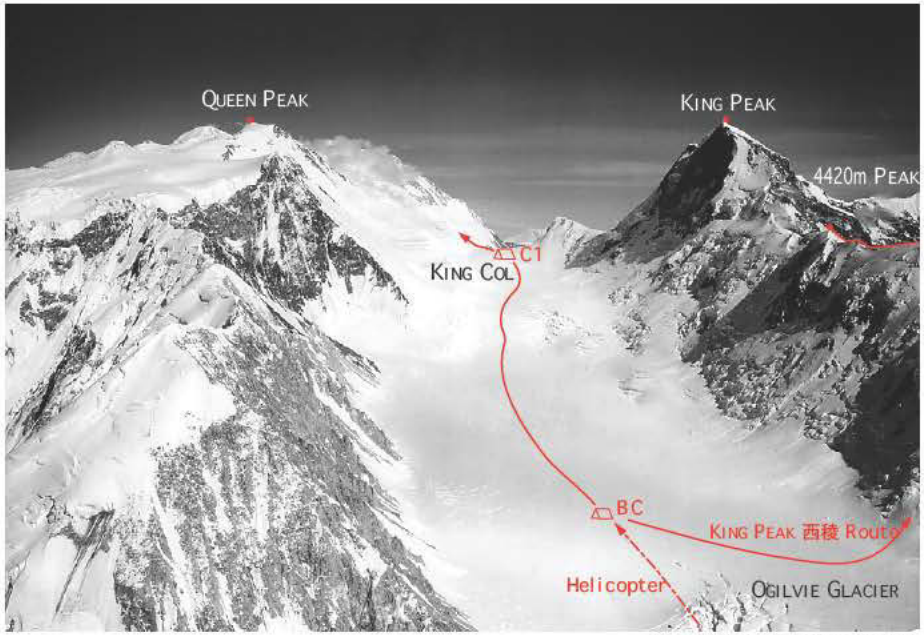


Photo: ©Bradford Washburn

セント・エライアス山群

アラスカの太平洋岸には、細長くアメリカ領がフライパンの柄のようにカナダの西海岸にくいこみ、この地域には高さ5000～6000メートルのアラスカ山脈がえんえん約1000キロメートルもつらなっている。この氷河地帯は南極、グリーンランドにつぐ大きなもので、その中ほどにあるマウント・セント・エライアス、マウント・ローガンをはじめとする峰々は広大な氷河に囲まれ、極地的な要素が多く、徒歩による接近は困難であるため小型飛行機やヘリコプターによる入山が一般的になっている。

マウント・ローガン（6054m）

マウント・ローガンはカナダ・ユーコン領州の西端、アラスカとの国境近くに位置するカナダの最高峰で、北米大陸ではマウント・マッキンレー（6191m）に次ぐ高峰である。

マウント・ローガン登山史

1925年　Mc Cartny隊、西稜より中央峰初登頂
1950年　Read, Tnayer両隊、西稜より中央峰登頂
1957年　Roberts隊、東稜より東峰初登頂
1959年　Gmoser隊、東峰第2登
1961年　ハーバート大学隊、東峰第3登
1964年　コロラド隊、インディペンデスリッジより中央峰と北峰登頂
　　関西学院大学隊、東稜より東峰と中央峰登頂
　　学習院大学隊、西稜より中央峰登頂
1965年　防衛大学校隊、インディペンデスリッジより中央峰登頂
1966年　アメリカ隊、キングピーク西稜よりマウント・ローガン中央峰往復

私達の計画は1925年の初登と同じ西稜より中央峰に至るもので、山頂よりのスキー滑降は新しい試みであった。

キング・ピーク（5176m）

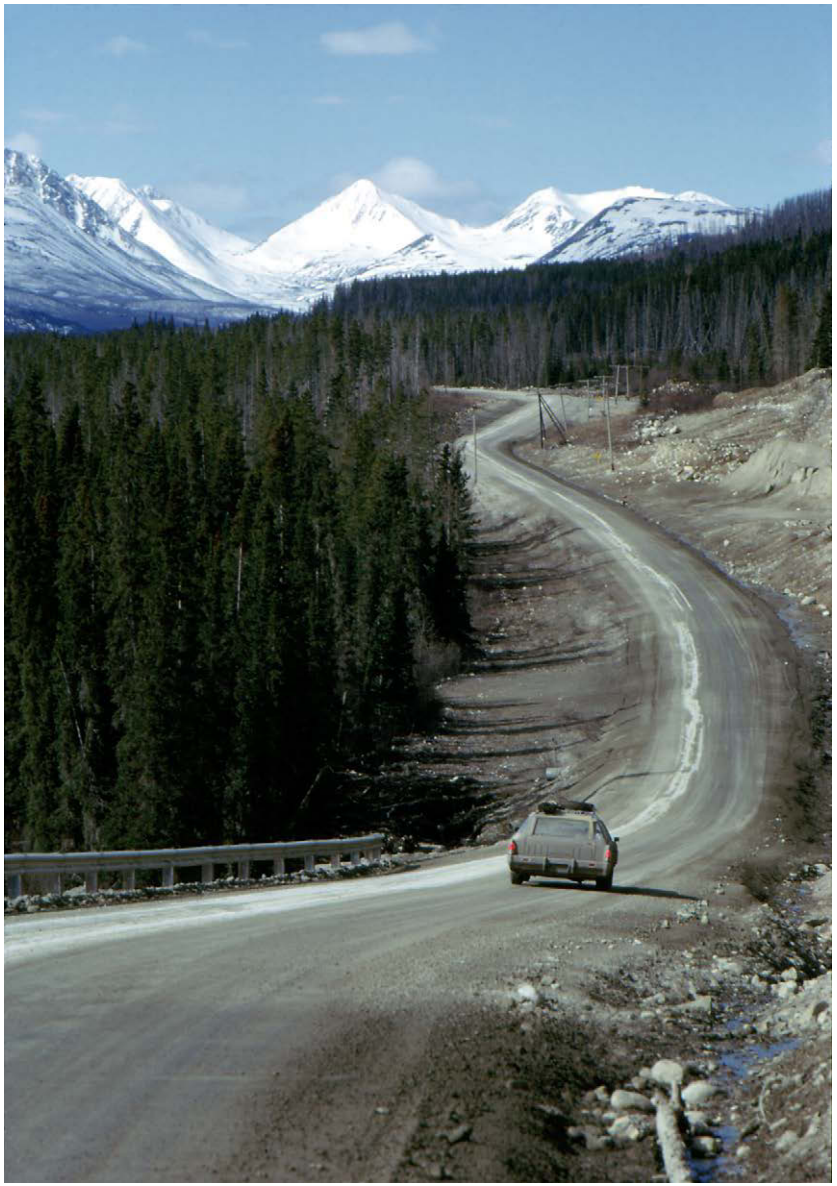
マウント・ローガンの西方にあるキング・ピークは、1952年アメリカ隊によってキングコルから初登頂された。1966年にはエバレットの率いるアメリカ隊が西稜より登頂し、さらに足を伸ばしマウント・ローガン往復という快挙がある。
日本隊は1969年に日大三島高校山岳部OB会が、アラスカ最大のセワード氷河のある南面のルートより登頂に成功している。
私達はマウント・ローガン下山後、西稜より登攀を開始した。

Mt. LOGAN へのキャラバン

バンクーバーから装備を満載した大型ステーションワゴンでアラスカハイウエーを北上。一日に500～600キロメートルのドライブをしながらキャラバンを続ける。約４ヶ月にわたるカナダの山旅のなかで屋根の下のベッドで寝たのは、わずか10日ほどであった。

単調なハイウエードライブで起きたハプニング。スピンをした自動車はスタート地点のバンクーバーへ向いてしまった。幸いにも大事には至らず、タイヤのバーストだけで済んだ。

キャラバン５日目にユーコン州ホワイトホースに到着。日系二世マガミ氏宅の裏庭をお借りし、東京から空輸した約200キロの荷物を登山活動用に区分け梱包する。近所の子供達が物珍しそうに集まり、手伝ってくれた。



「アラスカハイウエー」とは名ばかりの泥を固めただけの道路。全く人気のない荒涼とした風景の中を、時速100キロメートル前後でひたすら走り続ける。雪解け時期であったため、延々と続くぬかるみの中をドロしぶきを上げつつ前進する。

標高3360メートルのベースキャンプ。春の息吹の感じられる下界より、一時間ほどのヘリコプターフライトで一気に雪と氷の世界へ飛び込み、心身ともに困惑する。
スケールアウト、白夜による体内時計の狂い、一瞬にしておきるホワイトアウトとブリザードそしてクレバスに神経を使う。正面はキング・ピーク北壁、標高差は約1200メートル。

白夜　午後 10時頃から数時間におよぶ夕焼けが始まる。それは午前３時頃には朝焼けへと変化し、地平線近くにある太陽は再び天空へ昇ってゆく。

写真左　キングコルのキャンプ１の正面に見えるローガン南西の氷瀑。氷の断面は高さ300メートル程あり、ここから氷瀑は崩壊し、轟音とともにセワード氷河まで一気に 2000 メートル落下する。

写真右　キャンプ１上部のセラックス帯を越え、アイナピークの斜面をルート偵察する。前方のアイスビルディングの先はセワード氷河に向けて氷河末端の崩壊が始まっている。

雲を抜けると、そこはどこか別の天体にいるような光景だった。ダイヤモンドダストに包まれながら山頂へ続く雪稜をゆっくりと登っていく。丸い虹とキラキラと輝く大気の中で、かつて体感したことのない何かに包まれるような安心感と至福の時間が穏やかに流れていった。

6月 18日 10時 15分登頂　入山以来34日目、その間晴れた日はわずか7日。平均気温零下20度、悪天候の中の荷上げ、凍傷、高度障害。入山当時の安易な気持は、ことごとく破られるような悪条件の登山であった。顔はむくんでいるが、山頂にたどり着いた喜びがどの顔にもあふれ、一人一人としっかりと握手をした。頬を流れる涙が、いつしか冷たく凍りはじめていた。
大久保隊長はザックの中の小物入れよりフィアンセの写真を取りだし「着いたよ！」と話かけていた。高林と斉藤は執念で運び上げたタバコに火を付けようとしていた。清水は低温で切れそうなフィルムの装填に手こずりながら記念写真の準備をした。
そして次のようなメッセージと４人のサインを入れたクラブ旗を山頂に埋めた。

We came from great distance to skiing down Mt.Logan

写真右　キャンプ3と2を撤収し、キャンプ1へ滑降する。雪質は重く変化しており、荷物も増えたため慎重に滑降を続けた。

KING PEAK 登攀

6月21日ベースキャンプに帰還。つかの間の休養後23日よりキングピーク西稜の登攀を開始。西稜の取り付きは、ヒドンクレバスと雪崩そうな急峻な雪壁を登るしかルートが取れない。どこまでも続くナイフエッジと巨大な雪庇で、丸一日中気を抜ける場所はない。

スノードームの登りは氷の段を右に左に迂回しながら高度をかせぐ。

白夜が始まる前にようやく雪洞が掘れそうな雪稜に出た。そこは早朝ベースキャンプを出発して以来、初めて滑落や雪崩の心配のない場所であった。

登攀２日目も急峻な雪壁やナイフエッジが続く。稜線の右側はオギルビー氷河へ、左側はクインテノセーラ氷河まで1000メートルほどスパッと切れ落ちている。

日数不足のため登頂は断念し、ビバーク地点で穏やかな夕焼け空を眺めていた。眼下に見える巨大なクレバス、遙か南に広がるアイスフィールド、どこまでも連なる山並みと沈まない太陽。悠久な宇宙の営みの中で、ここしばらく胸の中に張りつめていた何かが癒され、消えてゆくのを感じた。

登山活動添景

セラックス帯の上部に広がる緩やかな斜面の荷揚げ（4400m付近）。高度障害が出はじめ息切れが激しい。振り返るといつも美しいキング・ピークの姿があった。

スキー滑降を成功しキャンプ１へたどり着くと、米コロラド隊が「Excellent!!」を連発し、派手に祝福してくれた。

キャンプ１の上部にあるアイスビルディング、これを左に巻き込むとセラックス帯が始まる。ヒドゥンクレバスに細心の注意を払いつつ、氷塔の間の迷路をぬいながら高度をかせぐ。

６週間ぶりに大地に降り立つ。緑の臭いのする濃い空気を胸一杯に吸い込み、ようやく地に足が着き安心した。

岳人

特集／冬山装備を使いこなす
特集／詩情の山
カラー／Mt. ローガンスキー滑降
紀行／ネパール、パキスタン辺境の旅

'73. 11

■1973年5～6月の記録

Mtローガン スキー滑降

東海大学体育会山岳部ＯＢ会

ヘリコプターからマウント・ローガン北面をのぞむ。そのいかめしい表情が目前にせまる。

重荷を背負い第１キャンプへ移動中。
気温は零下30度近くまで下っている。

雪煙をあげてベースキャンプ（3360m）に着陸するヘリコプター。パイロットのボブ・ダンバーはユーコン州初ての山岳パイロット、弱冠27歳の好青年である。

第1キャンプ上の急斜面。この上からクレバス帯がはじまる。

高所靴は足首の部分が柔かくスキー操作が困難なため、空になったガソリン用のポリタンクを利用してブーツプロテクターを製作した
— 写真右 —

スキーの滑走面に両面接着テープを張り、しっかりとシールを固定すると、その消耗が少なくてすむ。
—写真左—

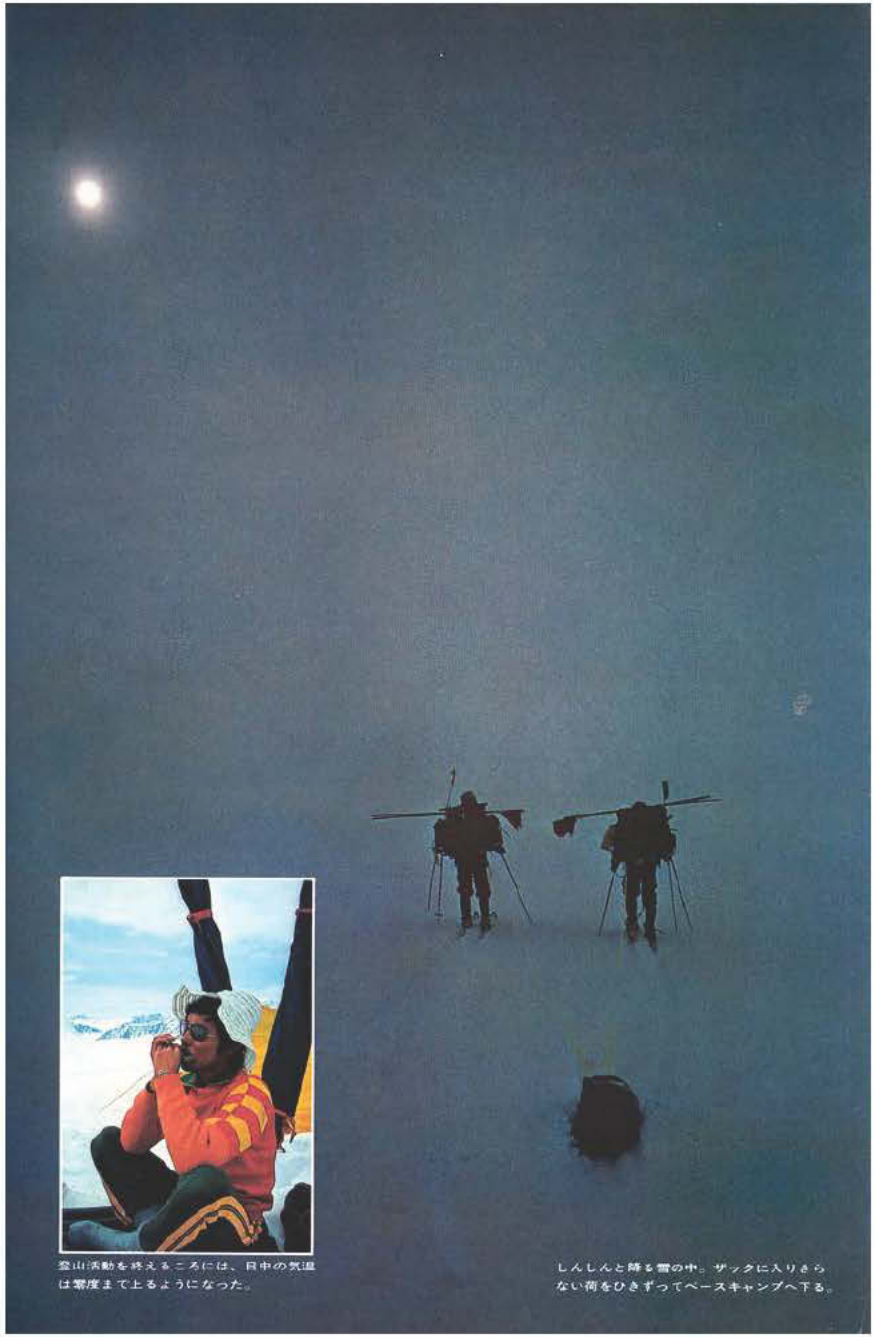
荷上げの往路は思う存分雪の斜面にシュプールを描く。

第2キャンプへの登りを終え、アスピリンスノーの斜面を快適に滑走。バックはセント・エライアス山脈中最大のセワード氷河。マウント・オーガスタの後方にはアラスカ湾がのぞまれる。

マウント・ローガンの南面がみわたせるキングコル（4200m）に第2キャンプを建設。

悪天候のときは雪洞の中でトランプをしたり、ケーキを焼いて時間をつぶす。

登山活動が終わると安堵感がおそう。テントでは徹底的に無精をきめこむ。



登山活動を終えるころには、日中の気温は零度まで上るようになった。

しんしんと降る雪の中。ザックに入りきらない荷をひきずってベースキャンプへ下る。

マウント・ローガン スキー初滑降

1973年5月～6月の記録
東海大学体育会山岳部OB会

カナダの最高峰

四季を通じて、われわれはオールラウンドな山登りを心掛けているし、スキーはその技術の一つとして活用してきた。この二本の板が持つ自由さに、いつしか心を奪われ、北アルプスの峯々を滑りまわるようになった。1972年の春には富士山の滑降に成功。そのころからより大きなスケールの山を滑ってみたいという望みが、若手OBの中で高まりはじめた。

雪が豊富で雪線が低くスキーに適した山域ということで、アラスカと、カナダのユーコン州の山々に目標が絞られた。北米大陸第一の高峯であるマウント・マッキンレーは、すでに日本の山岳スキーの第一人者である植木毅氏が滑降に成功している。そこで、二番目に高いカナダの最高峯であるマウント・ローガン（6054m）のスキー滑降の可能性について検討してみた。

ローガンは東西45km、南北38kmにおよぶ山塊である。周囲は2000m前後の急峻な壁に囲まれ、その上部は広大な雪氷原となり、東西にいくつかの峯が走っている。文献、航空写真を調べた結果、その中央峯より北側の高所台地を滑り、いったんアイナピークを越えて西稜の南側斜面を通って、キングピーク西稜とローガンのクィーンピークから派生する尾根にはさまれた氷河までの30kmにわたるルートを見いだした。

参加メンバーは大久保善雄（25歳）、高林潔（25歳）、斎藤純一（23歳）、清水敬示（24歳）の四名である。これは、この山域で入山許可のおりる最小限の人数である。

ジェットヘリでベースへ

5月10日、バンクーバから装備を満載したレンタカーで埃とぬかるみのアラスカ・ハイウェイを北上し、五日目にユーコン州の首都ホワイトホースに着いた。ここはかつてゴールドラッシュで栄えた町で、ユーコン川を上下した当時の名残りの外輪船や丸太造りの教会などが町の各所に見られる。町には日系二世の真神（まがみ）氏が住んでおり、

KASKAWULSH GLASIER

初対面にもかかわらず入山前の手続きとか交渉、準備に暖かい援助をしてくださった。

ローガンは、アラスカ・ハイウェイの最も近い所からでも直線にして120kmほど奥にある。そこから山麓へたどり着くには、凶暴な熊や野生動物の生息する樹林帯、ブッシュ帯を抜け、さらに南極、グリーンランドに次ぐ大きな氷河を遡上らなければならない。しかし、ヒマラヤのようなポーターは皆無で、通過には危険と多大な時間を必要とするため、ヘリコプターとか軽飛行機による入山が一般的になっている。

16日の午後、チャーターしたジェットヘリコプターで野生動物の緑の王国を飛び越えて、白銀の世界に入った。時速200kmの飛行も、周囲のスケールが大きいため景色はゆっくりとしか変化しない。一面雲海のように見える広大なアイスフィールドを横切ると、前方に上部を雲に包まれたローガンが見えてきた。ヘリコプターはその北壁沿いに、揺れながらいくつもの鋭い雪稜や岩稜すれすれに通過し、ベースキャンプ予定地に着陸した。そこは、キングピークとローガンにはさまれた3360mの氷河である。

ベースキャンプの近くには、アメリカとカナダのパーティがやはりローガンを目指しキャンプを張っていた。アメリカ隊は一週間も風雪にとじ込められ、天幕は強風で引き裂かれ、行動中、クレバスに落ちて宙吊りになる隊員も出て、さんざんの様子である。カナダ隊は同じ日の午前中に入山していたが、隊長は昨年斎藤がカナディアンロッキーを訪れた際に、登山のアドバイスをしてくれた国立公園管理人のフューラー氏だった。まさか、マウント・ローガンからのスキー初滑降という同じ目的で再会しようとは、夢にも思わず、お互いあっけにとられて言葉が出なかった。アメリカ隊は７名、カナダ隊は10名と、どちらも強力なパーティである。

２回のフライトで、隊員４名と450kgの物資の空輸が終わった。しかし、たった一時間ほどの間に春の息吹きの感じられる大地から、急に写真でしか見たことがない岩と雪と氷の大自然のまっただ中に置かれ、身も心も困惑した。

ベースキャンプの正面にはキングコルへ続く氷河が見えた。その氷河に左からローガン西稜の末端が切れ落ち、右にはアイガー北壁を二つ重ねたような岩壁をもつピラミダルなキングピークが眺められた。

ここは北緯60度よりやや北に位置し、一日のうち3～4時間ほどしか太陽が沈まず、その＜白夜＞のために私たちの生活のテンポも変化した。薄暗くなる午後11時ごろに眠り、太陽がかなり昇っている午前８時頃に起き、出発は10時すぎ、帰幕は、下界の極地研究所と定時交信のある午後７時前という、今までの山行では考えられないような生活になった。

第２便がベースキャンプに到着

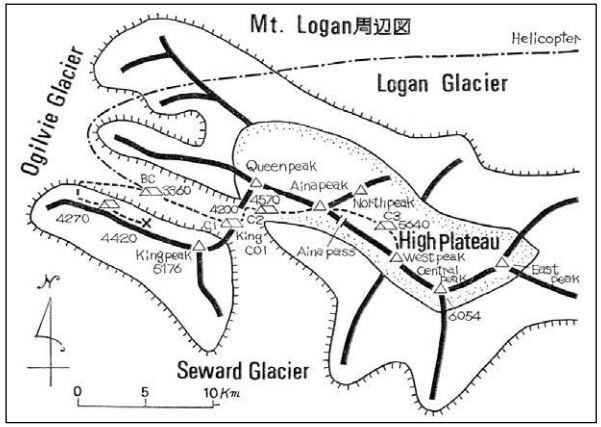
出発の準備は手間がかかる。冬山用の完全装備を着て外に出てから、パラシュートに使うような上下続いた安全ベルトを締める。二人ずつのペアに分かれ、ザイルを20m間隔で結び、ザイルにユマールをセットしてそのロープを片足に通す。スキーにはシールを貼り、スキーの締め具を歩行用に踵が上がるように調節し、それからザックを背負い出発である。

氷河のない日本の山ではこんな装備は不必要だが、クレバスに墜落したことを考えるとこれが最低限の装備になるのだ。体中に色々なものを付け、登るだけでも苦痛なのに、ザイルを結んだままのスキー滑降は、スピードもあり、お互い息が合わないとスキーどころではない。ヒドンクレバスがあり、一緒に並んで滑るのは危険で、常に斜面に対して上下の間隔を保たなければならない。もしパートナーがクレバスに落ちた場合、瞬間に停止し、スキーを履いたままの不安定な姿勢で確保態勢をとる必要がある。

入山前に聞いていたように、今年は例年にない悪天候で連日風雪、ブリザードが続き気温が低い。それでも歩けないほどの悪天候でない限り、私たちは第一キャンプ予定地のキングコルへの荷上げを実施した。

キングコルへのルートは、特に問題になるような所はなかった。しかしはじめのうちは周囲の大きなスケールに惑わされ、予想時間の２倍もかかった。

激しい降雪の日であった。キングコルへあと一時間ほどの所を重荷にあえぎながらラッセルしていると、突然鳥の鳴き声が聞こえた。振り向くと、三羽のツバメが風に逆らって飛んでいた。一羽はかなり弱っているらしく、幾度も雪面に落ちそうになった。すると、他の二羽がそのツバメの下に入り込むように、励ますように飛び、コルの方を目指し霧の中に消えて行った。この100km四方は、氷雪に閉ざされ、山を登る人間以外生物はいないと思っていただけに、4200mの峠を越えて行ったツバメに、心暖まるものを感じた。



入山して9日目の**5月24日**、私たちはようやくキングコルに一張りの天幕と、イグルーの第一キャンプを建設した。その間、晴れた日は、19日の一日だけであった。

26日、いつもキングピークとローガンにたれこめていた雲が流れた。大久保、斎藤は装備、食糧のチェックをしてから、コルをはさんだ反対側のキングピークへ続く尾根に登り、ルート偵察に行った。清水、高林はコルの上にあるセラック帯のルート工作に出かける。コルより急斜面を登ってゆくと、ローガンの南面からボブの操縦するヘリコプターが飛来し、コルの上部で旋回し、ベースキャンプの方に飛んで行った。見ると、カナダ隊のキャンプはすでに人っ子一人なく、アメリカ隊も下山をはじめていた。彼らはまだ日数が二週間近く残っているが、この悪天候に見切りをつけ、下山して行ったのだろう。

急斜面を登り、アイスビルディングを右にまき、不安定なスノーブリッジのかかった深いクレバスを二つ越え、さらにその上の斜面を一時間半ほど登って、セラックス帯の手前まで行った。その日の偵察はそこで引き返した。

28日、対岸の尾根から偵察した結果、二番目のセラックス帯の右端に、一カ所だけ上部の斜面へ抜けられるルートを発見した。

30日、31日と珍しく二日続きの快晴だった。4570m地点にあるクレバス帯の中に雪洞を掘り、第二キャンプを建設した。ここより上部へは、うまくクレバスを避けてゆけば、問題なくアイナピークの左に出られそうである。

6月3日、快適なスキーができそうな斜面を稜線直下の5500mまで登り、荷上げとルート偵察を行う。

7日、第二キャンプの食糧はいよいよ底をつき、第一キャンプへ補給に下るか、それとも稜線直下に荷上げした食糧のところまで登り、そのまま頂上へ向かうか、岐路に立った。朝方ローガンの南面を厚く被った雲が動き出したので、アタックを決行した。

時たま視界は悪くなるが、上空は晴れている。3ピッチで食糧デポに着き、それらをザックにつめた。これから先は氷化した斜面のため、スキーをぬぎアイゼンに履き変える必要がある。

強風の吹き抜けるアイナピークの西の肩を越え、北側の斜面に出た。しかし、大きなシュカブラや氷の段があり、スキーは使用できず、アイゼンのままピークをからみつつアイナパスに下った。それより北側の高所台地の緩斜面を、ふたたびスキーを履き、登りはじめたが、天候はしだいに悪化。やがて風雪となり、視界はきかなくなってきた。パスより3ピッチ目で動きがとれなくなり、クレバス帯の斜面に雪洞を掘った。かなり穴を広げたところで、底が見えないクレバスに当たってしまった。場所を変え、再び掘りはじめたが雪は堅く、掘るそばから雪にうめられ、作業は一向に捗らない。気温は零下43度を下っていた。骨の髄から締め上げられるような痛みを伴う寒気で、頭が冷やされたためか、思考力が鈍り、睡魔におそわれる。一本のスコップを交代で使った。待つ間、息が髭に、顔面のうぶ毛に、氷となってくっつく。

気温はー40℃を下りはじめていた

雪穴にもぐり込み、靴をぬぎマッサージをしてみたが、全員足の感覚が戻らず、とくに清水は指が紫色に変色し、水泡ができ、第二度の凍傷になっていた。

翌8日、小康状態となったので雪洞を抜け出て登りはじめた。しばらく進むと低温のためか、高林はきのう同様、腹痛で動けなくなってしまう。ツェルトを被って休んでいると、視界がきかなくなり雪洞へ引き返した。

全員、高所衰退がひどく、頭痛、吐き気、倦怠感、食欲不振に苦しめられた。ローガンは6000mちょっとの山であるが、地球の自転運動によって、極地に近いここは赤道付近に比べ空気の層が薄く、赤道付近の7000mの山と同じである。酸素が肺内に入る時は平地の1/3～1/4の薄さである。

9日も晴れず暴風雪となった。食糧も切れ、これ以上この高所にいると、それこそ体が衰弱して動きが取れなくなる恐れが出てきた。午後になってから意を決して、暴風雪の中を下山することにした。

雪洞を出てまもなく、斎藤は強風が雪煙と共に吹き抜けた時「雪崩だ！雪崩だ！」と叫びながら、雪崩に巻き込まれたかのように雪面に倒れ、もがいていた。また、あたり一面乳白色に包まれているため、体の平衡感覚がおかしくなり、転倒しやすくなった。本人は滑っているつもりでいるのだが、滑降姿勢のまま止まっているのを、他の人から教えられ、それに気がつくこともあった。約80m間隔に標識用の竹竿を立てて

おいたが、それをも見失いがちの下降を夜中まで続けた。第二キャンプにやっとたどり着いた時は、全員極度の疲労から、しばらく放心状態で雪洞の前に座り込んでしまい、大久保は咳と共に胃の中の物を吐いて、顔をゆがめていた。

頂上から40度の壁を

16日、第一キャンプ、ベースキャンプへと下り、食糧、装備の補給と休養をし、一週間ぶりに再び第三キャンプへ登った。**17日**は風雪であったが、夕方より晴れ間が見えはじめた。

18日、朝7時に出発。歩きはじめるとまもなく霧が出はじめ、稜線は見えなくなり、そのうち高所台地もすっぽり霧に包まれてしまった。しかし食糧、燃料も乏しく、今日がラストチャンスなのでおして前進を続けた。すると、幸運にも稜線の雲が流れ、高所台地の上部が雲海の上に出た。今まで山頂に近づくたびに天候が悪く、どれが中央峯か判別がつかないため、前方の大きな雪峯に登ることにした。

雪峯から北側に伸びた稜線をたどって行くと、空一面が白いベールを被ったようにキラキラと輝いていた。氷の小さな結晶が空気中に漂い、太陽の光をうけて輝く、ダイヤモンドダストという気象現象であった。その氷の結晶のため、太陽の周りには七色の虹の輪ができ、どこか、他の天体を歩いているような気持ちがした。

スキーをアイゼンに変え登って行くと、左に東峯が見えてきた。下から見えていた峯に登ると、さらにその先に鋭い峯が現れた。

その鋭い山頂に立ち、周囲を見まわしたところ、他には高い峯も見当たらず、そこには前年に登頂した人のものと思われる標識用の竹竿があり、中央峯であることを確認した。午前10時15分であった。

入山以来34日目、その間晴れた日はわずか7日。平均気温零下20度、悪天候の中の荷上げ、凍傷、高度障害。入山当時の安易な気持は、ことごとく破られるような悪条件の登山であった。顔はむくんでいるが、山頂にたどり着いた喜びがどの顔にもあふれ、一人一人としっかりと握手をした。頬を流れる涙が、いつしか冷たく凍りはじめていた。

山頂で記念撮影をしていると、北側に安定していた雲海が動き出し、山頂は雲の上に浮かぶ島のようになり、早々に下ることにした。山頂は狭く、ナイフエッジになっているので、一段下った肩の所からスキー滑降を開始した。

シュカブラにスキーをとられ、アイスバーンに流されながら尾根を滑り、西側のコルへ落ちる40度はある斜面に滑り込んだ。しかしこの斜面は、薄黒くなった氷の部分がかなりあった。高度の影響で体の運動機能は弱っており、息切れも激しい。安全を期して斜滑降で滑り、キックターンをくり返し、それより北面の台地に向け、長い斜滑降を続けた。

視界はもうかなり悪くなっている。立ち止まって振り向くと、後の二人もザイルを上手に操りながら、霧の中からぼんやりと現れてくる。スピードを出しすぎてルートを誤らないよう、時たま全制動をかけ、クリスチャニアで滑降をする。もうこの頃になるとアンザイレンスキーもすっかり板に付き、先頭の滑りに合わせ、つかず離れずスムーズにできる。交代で標識用の竹竿を回収し、快適な滑降を続けた。

ハイ・プラトーを快適に滑降（5800m付近）

アイナパスで休憩し、アイナピークの登りになるが、足腰が効かない。やっとのことで稜線に登り下を見ると、氷河の研究で登って来た極地研究所のメンバーが見えた。「成功！」と叫びながら下って行くと、歓声が上がり、粉雪をけって駆け寄り「おめでとう！よくやった！」と肩をたたき、手をにぎり、成功を自分のことのように喜んでくれた。

水、干果物、ジュースと次々に出されるものをたいらげ、再び第二キャンプへの滑降がはじまった。この付近は不思議と雲がなく、太陽が顔を出して視界がよい。膝下までもぐる軽い雪の中を、叫び声をあげながら、飛ばす。

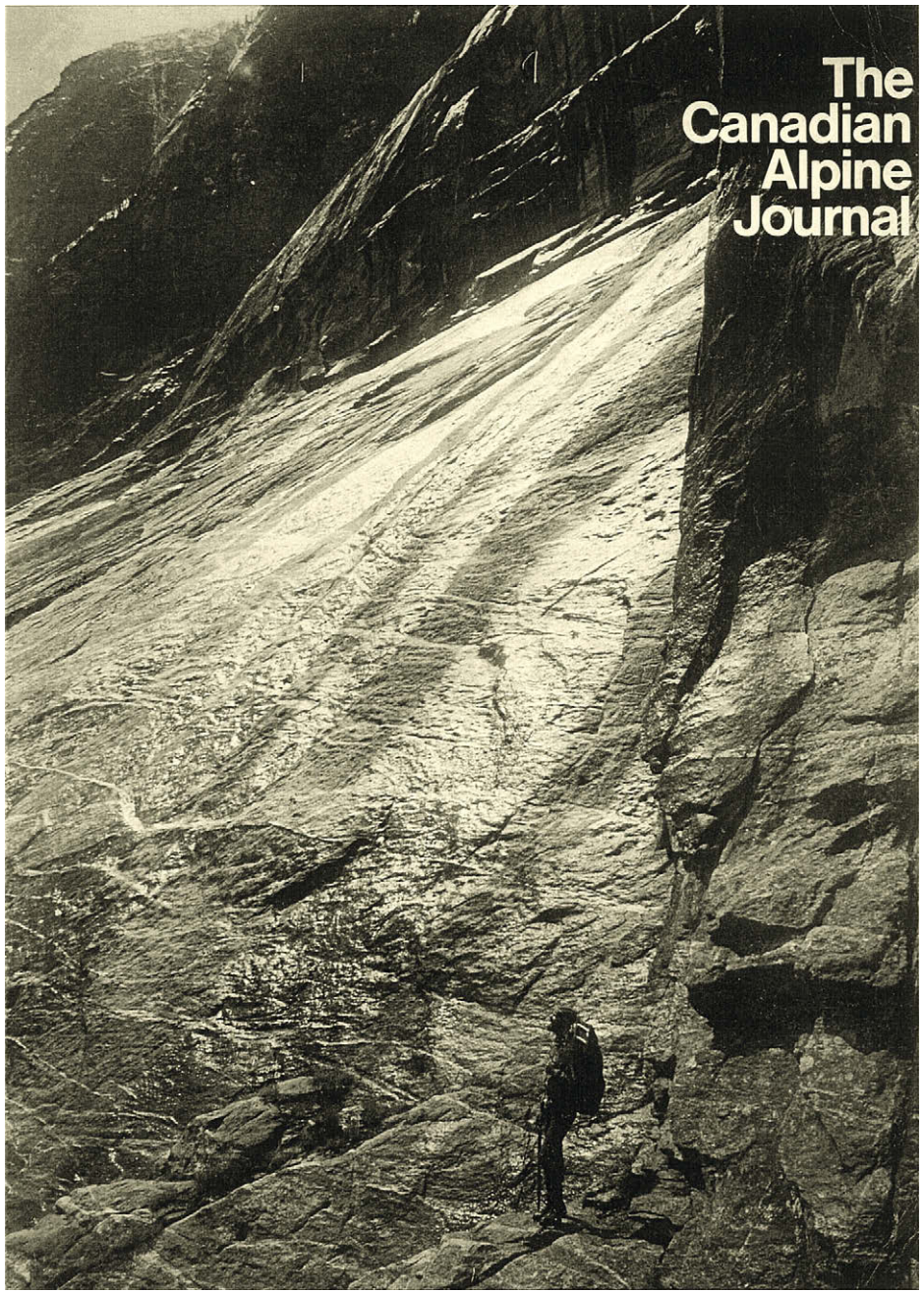
ふたたび雲の中に突入し、第二キャンプを撤収して、ずっしり重くなった荷を背に第一キャンプへ向かった。しかし荷上げをしていたころとはうって変わり、雪質が悪くなり、一回転する度に息が切れてしまう。どうにかセラックス帯の上まで滑り、そこでスキーをぬぎ、すっかりクレバスが広がったその中を慎重に下り、第一キャンプへたどり着いた。

三日後、降雪の中、キスリングザックに入りきらない荷を袋につめ、ザイルで引きずってBCへ最後の滑降をおえた。

23日より、西稜からキングピークの登攀を開始したが、大半の装備、食糧をローガンに費やしたため、4420m地点までしか登ることができなかった。そして**6月30日**、一ヶ月半ぶりに緑の大地に降りたった。

帰国後、登頂した峯について疑問を持ち、私たちの下山後、東稜から西稜への縦走に成功した大阪の泉州山岳会に問い合わせたところ、私たちは西峯を中央峯と誤認していた。6月18日の登頂日は、中央峯が南面からわき上がる雲にかくれ、その存在を見失っていたようである。西峯の標高は6000mを少し出ているとのことであった。

（清水敬示 記）



The Canadian Alpine Journal

The Canadian Alpine Journal Volume 57, 1974
Published by the Alpine Club of Canada

EDITOR
Moira Irvine

OFFICERS OF THE CLUB 1973-1974
Honorary President
Phyllis B. Munday
Honorary Vice-President
The Honourable Jean Chrétien
Minister of Indian Affairs and Northern Development
Immediate Past President
David R. Fisher

BOARD OF MANAGEMENT
President
Stanley Rosenbaum
Eastern Vice-President
Maurice Tyler
Central Vice-President
Donald Forest
Western Vice-President
Bob Paul
American Vice-President
Lewis McArthur
Board Members
Frances Losie
Bruce Mackedie
Club Manager
Pat Boswell
P.O. Box 1026, Banff, Alberta

TABLE OF CONTENTS

2 Dhaulagiri IV: An Attempt from the South *Chic Scott*
4 Klinaklini Clouds *John Clarke*
8 Warrior *Hugh Burton*
9 On the Ecstacy of Defeat *Brian Norris*
11 The Mountain Landscapes of J.B. Taylor (1917-1970) *J.A. Forbes, Harry Habgood*
11 Buddha Ridge, Mt. Rundle *Matt Scott*
12 Three Wishes *Karen, Smitty's Poetess*
13 Peruvian Pedants *Howard Bussey*
15 Vancouver 1974 *Peter F. Rowat*
15 West Ridge of Mt. Hubbard *Chris Field*
17 Mt. Deltaform: North East Face *George Lowe*
17 Haundoy Norte *Judy Cook*
19 Sometimes You Know—Sometimes You Don't *Jim Sinclair*
19 Chutine Lake *Ross Wyborn*
21 A Climber's Guide to the Shawbridge Cliffs *Kevin O'Connell*
23 Baffin Island 1973 *E. Whalley and members of the expedition*
30 Leaning Tower the Hard Way *Elena Underhill*
30 Skiing Down Mt. Logan *Keiji Shimizu*
33 The Columbia Icefield *Glen Boles*
34 In the Shadow of Karnak *Curt Wagner*
35 Mt. Sir Douglas: North West Face Direct *Murray Toft*
35 Tellot Lake to Knight Inlet *Sara Golling*
37 A Family Trip to the Valhallas *Peter Rowat*
39 The Cirque of the Unclimbables *Jim Mark*
39 Rambles Along the Caledonian and Alpine Chain 1971-72 *Karl and Nancy Ricker*
49 Editorial *Moira Irvine*
49 Of People, Trees, and Environmental Extremists *Jo Ann Creore*
50 An Analysis of Alpine Hut Use in Banff and Yoho National Parks *Kevin O'Connell*
51 Mountains As Scenery *Barry Sadler*
53 The Canadian Glacier Inventory *Simon Ommanney*
54 Acute High-Altitude Illness in Mountaineers and Problems of Rescue *Rodman Wilson, MD, FACP*
58 Reviews

CLIMBING REPORTS

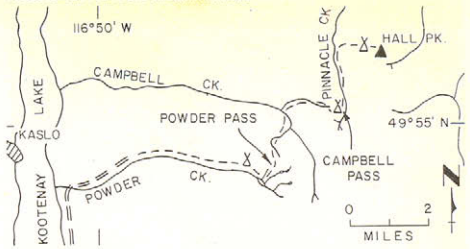
62 Coast Mountains
68 Squamish
68 St. Elias Mountains and the Yukon
75 Interior Ranges
81 Rocky Mountains
88 Québec
93 Eastern Arctic Mountains
98 Foreign

Copyright: The Alpine Club of Canada, 1974 ISBN 0-88894-031-9

Cover: Slabs in Mulvey Creek, Valhalla Range *Peter Rowat*

On Mt. Hubbard *Doug Dolginow*

Access to Hall Peak *Elena Underhill/M. Irvine*



Base camp, 11,000 ft *Keiji Shimizu*

Helicopter *Keiji Shimizu*

Camp 1 *Keiji Shimizu*

summit ridge, passing ice cliff to right, and summit, which was reached at 1045 h. South east ridge followed on ice to junction with glacier F29, but no easy way down found (later inspection from below showed lower part of the ridge can be descended to the south). Ridge re-ascended almost to summit, and the blocks of south west ridge descended. A flat part about 400 m long had an ice wall on right (north west). A 600 ft 45° ice slope descended on crampons with some belays to glacier F28, which was descended to snout and camp at 2145 h.

11 "Cracked Peak" DJ334278 c. 5410 ft. The name was suggested by the Swiss apparently because summit is composed of two large blocks, separated by a north east to south west cleft about 12 ft wide. 2nd ascent almost complete, 1st ascent of south east ridge, 1st descent of south east face, Anderson, Butson, Frame, 30 July. From camp in Revoir Pass 2 km from Eglinton Fiord at 1145 h along Pass and up glacier F29 to glacier bowl south east of peak. Left side of south ridge ascended, passing three large towers and over steep ice, in six pitches. Steep 130 ft grade III plus crack leads to summit ridge, followed easily to north summit block. Five routes to unclimbed north summit attempted, the most successful being a 55° 150 ft ice gully leading to cleft between two blocks. An icy ledge on south block reached by a 20 ft grade IV-V pitch but, as the party had no pitons, no further progress made. Because of the time, (2310 h) the relatively easy traverse to the north summit not made. Descent made easily over south east face to glacier and asecnt route followed back to camp.

41 "Cleaver Peak" DJ332260 c. 4260 ft. 2 km south of Cracked Peak. 1st ascent, 1st traverse south north, Blades, Whalley, 30 July. From camp in Revoir Pass, 2 km from Eglinton Fiord at 1145 h. along Revoir Pass and up glacier F29 to glacier bowl south east of Cracked Peak. The party split here, part going to Cracked Peak. The mountain traversed up south ridge and down north ridge, the summit being reached at 1805 h. South ridge is clean and slabby, 10 to 20 ft wide, with steep slabs on both sides. Traverse was continued to nunatak, no. 42, and peak 43 (q.v.).

42 DJ3526 c. 4080 ft. Large nunatak not marked on sheet 27F occupying centre of glacier basin ringed by peaks 41, 11, 43, 44, and 45. Summit at north west end, only ca. 80 ft above the glacier. South east end rises much further above the glacier, which is much lower there. 1st ascent, from north west, Whalley, 30 July after ascent of no. 41.

43 DJ360275 c. 5340 ft. 1st ascent, first traverse, south west—south east, Blades, Whalley, 30 July. After ascending nunatak 41 and peak 42, curving south west ridge reached and followed over slabs, snow, and ice to west summit (5320 ft at 2200 h), a block eroded in layers, presumably by wind. After a ½ h lunch break summit ice ridge traversed about 300 m to east and higher summit at 2300 h. The ice of the south east ridge descended part way across to snow gully on south side which leads down to glacier south east of the peak. Probably a mistake as snow in the gully very soft. Would likely have been easier to follow the ridge to the foot as snow on the glacier was firm. Pass between peaks 44 and 46 crossed and glacier followed to pass north west of the Cockscomb. Camp reached at 0500 h.

46 DJ400255 about 3800 ft. 44 DJ377252 about 4800 ft. 45 DJ372243 about 4500 ft. The semicircle of mountains west of south west end of pass north west of the Cockscomb. 1st ascent, 1st traverse of ridge between peaks 46 and 47, Ingold, 3 August. From camp in Revoir Pass up behind Cockscomb south ridge of no. 46 ascended up 1000 ft of scree followed by pleasant scrambling on firm rock. Descent to west, crossed ice col and reached peak 44 by very pleasant ridge walk. Descent to south, another ice col crossed to peak 45. Continued to peak 47 whose east slope descended to camp. About 12 leisurely hours.

47 DJ381227 c. 3800 ft. West wall of south end of valley behind the Cockscomb, overlooking Revoir Pass. 1st ascent, via east face and north ridge, Whalley, 2 August. From camp in Revoir Pass at 0430 h, summit reached over boulders, an ice gully and snow slopes at 0800 h. Summit left at 0900 h, camp reached at 1030 h. 2nd ascent, via north ridge from peak 45, Ingold, 3 August.

48 DJ403220 3000* ft. Westerly outlier of Cockscomb Mountain. 1st ascent, R. B. James, 30 July. From camp in Revoir Pass over loose rock and ice patches of west ridge. Ascent 2 h, descent 1¼ h.

49 DJ425063 3500* ft. First peak overlooking Ayr Lake north east of Eglinton-Ayr valley. 1st ascent, via west slopes, MacAdam, 30 July. From camp about DJ407110 in Eglinton-Ayr Valley at 1430 h via west slopes to summit at 1900 h. On descent valley reached at 2000 h, camp at 2330 h.

51 DJ487175 about 4600 ft. 50 DJ480175 about 5000 ft. Two peaks ca. 1km apart and about 6.8 km east of Englinton Tower. 1st ascent, by south east slope, MacAdam, 2 August. From camp at head of Eglinton Fiord at 0900 h along shore of fiord to glacier G36 at 1100 h. Glacier ascended, crevasses being avoided on true right moraine until a height of about 2000 ft just beyond glacier G36. West face traversed over steep boulder fields to easy south east slope, followed to summit of peak 51 at 1745 h. Summit of peak 52 reached via connecting ridge at 1845 h. Descent by same route started at 1930 h, glacier reached at 2215 h, fiord at 0045 h on 3 August, and camp at 0300 h.

E. Whalley and members of the expedition

1 J.M. Wordie. *An expedition to Melville Bay and North East Baffin Island* in Geog. J. 86, 297, 1935.
2 T.G. Longstaff and M.H.W. Ritchie. *The Shores of Baffin Bay* in Alpine J. 72, 49, 1935.
3 P.D. Baird et al. *Baffin Island Expedition 1950: a Preliminary Report* in Arctic 3, 131, 1950.
4 Berg der Welt 6, 1951.
5 P.D. Baird. Personal communication, 1 August 1973.
6 H. Röthlisberger. Personal communication, 1973.
7 For the Clyde area, Mike Frame, our radio man, recommends two Bell Canada frequencies available at both Clyde and Frobisher, for example channel 10; the single-side-band frequency monitored by the nearest DOT station, which is 4356 kHz at Clyde; 5680 kHz for emergency use, as it is monitored by all DOT stations; and the Hudson's Bay radio frequency if it is appropriate, for example 4834 kHz at Broughton Island and Pond Inlet.

Leaning Tower the Hard Way

On climbs throughout the Kootenays we again and again caught sight of a unique range of mountains in the Purcells east of Kaslo—beautiful sculptured 90 degree wedges. Gunther Offerman, Dieter Offermann and myself decided to climb the tallest—Hall Peak, commonly known as the Leaning Tower. The first ascent was in 1933 by the McCoubrey-Neave-Blanchard party (CAJ 1934-35).

The approach to the peak was long and difficult since the closest logging road was 12 miles distant and no trails existed. As long as it is humanly possible it is not our philosophy to be flown in to the base of a mountain . We planned on a three day hike. On the evening of 13 September we drove up a logging road which ends near the headwaters of Powder Creek and made camp. The following morning we hiked to a lake (6000') where we pitched camp. Along the way we saw many grizzly, elk and mountain goat tracks.

Morning—eagerly we set off. A magnificent view of the Leaning Tower even though still three miles away. Now we descend into Pinnacle Creek, about 1000 ft below, amid abundant huckleberries and wild raspberries. At valley bottom numerous rock avalanches alongside the creek made walking easier. After about three miles down the creek we began the 2500 ft climb to the great cirque directly below Hall Peak on the west side and made camp at the 8000 ft level. Leaning Tower, Block Tower, Shark's Head and all the rest of the range were aflame as darkness set.

The following morning we set out for the final ascent. First a huge headwall—enjoyable solid granite with good cracks. Next the col (9000') between Block Tower and the Leaning Tower. Left—Block and Wall Towers rising vertically for 1000 ft! Right—the abrupt rise of the northern ridge of the Leaning Tower. The rock face was extremely smooth with few hand and foot holds. We utilized the layback technique repeatedly. The most difficult part was 200 ft below the top where the only route was up a fine vertical crack with adjacent smooth rock. Next a few more larger cracks and jutting rocks, and finally the top. In the rock cairn we found the register with only three entries—the 1933 party, the 1956 Crosby party and the August 1973 party (Calgary Mountaineering Club).

The next day snow started to fall so we packed our gear and left hurriedly. Extreme terrain and weather made it impossible to achieve our objective in three days. Despite the time factor the trip went according to our plans and we completed the ascent of the Leaning Tower.

Elena Underhill

First reported in the *Kootenay Karabiner*, volume 16, 1973.

Skiing Down Mt. Logan

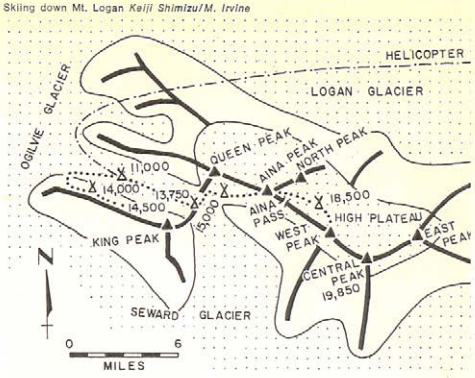
Throughout seasons of mountain climbing we have used skiis as one of the techniques. Captivated by the freedom skiis give us we found ourselves skiing almost every suitable mountain of the Japanese Alps. We succeeded in skiing down Mt. Fuji. Since then it had become our earnest desire to conquer much higher mountains. We focussed our aim on Alaska and the Yukon. Mt. McKinley had already been tried so we discussed the possibility of skiing down Mt. Logan. We decided to take a route extending 18.6

Skiing down from camp 2. Seward Glacier beyond, Gulf of Alaska behind Mt. Augusta *Keiji Shimizu*

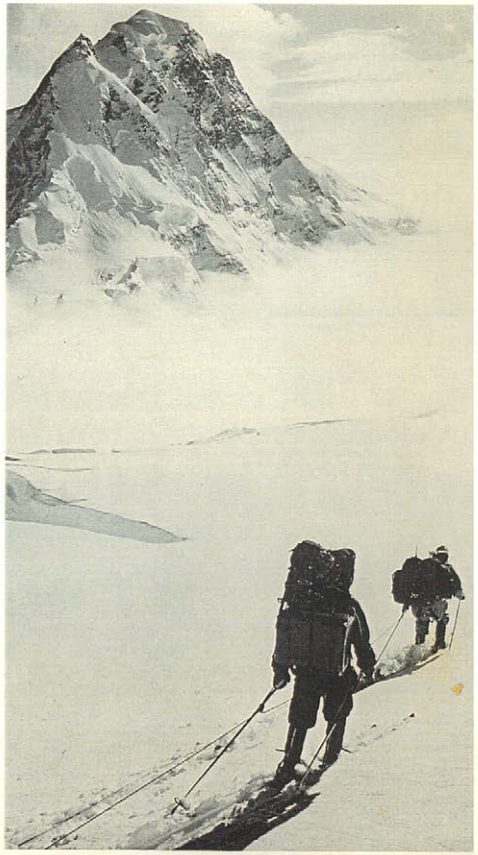
Steep slope above camp 1 *Keiji Shimizu*

Near Mt. Logan West Peak—the sun surrounded by a seven colour rainbow *Keiji Shimizu*

Skiing down Mt. Logan *Keiji Shimizu/M. Irvine*



Skiing down to camp 1 after ascent *Keiji Shimizu*



miles; starting from the Central Peak, skiing down the northern plateau to cross Aina Peak, through the southern slope of the west route to the glacier sandwiched by the ridges branching from Queen and King Peaks. The group consisted of Yoshio Ohkubo, Kiyoshi Takabayashi, Junichi Saito and Keiji Shimizu of the Tokai University Alpine Club.

On the afternoon of 16 May we flew across the "Green Kingdom of Wild Animals" by chartered jet helicopter and landed in the world of snow. At 120 mph over such vast surroundings the sights below changed very slowly. Our base camp was on the glacier at 11,000 ft sandwiched between King Peak and Mt. Logan. Within an hour, from feeling spring just around the corner, we were suddenly placed in the midst of a world of nothing but rocks, snow and ice. We were embarrassed both mentally and physically at this sight which we had only seen through pictures. In front of our base camp was the glacier leading to King Col. The foot of the west route of Mt. Logan cut into the glacier from the left side and there stood pyramidal King Peak on the right like two Eiger north faces overlapped together. At 60°N latitude the sun sets only for three or four hours a day. The "white nights" gave us a different way of life we had never experienced before.

The weather was unusually bad but we carried up to King Col, our camp 1 site, as long as possible. The route was not difficult but being puzzled by the vast surroundings it took us twice as long as expected.

On 24 May, our ninth day on the mountain, we finally set up the first igloo and tent on King Col. The clouds which had always hung over King Peak and Mt. Logan cleared away on 26 May. Scouting showed us one route leading to the upper slope on the right hand side of the crevasse area. We had two fine days on 30 and 31 May. In the crevasse area, at 15,000 ft we built a snow cave to set up camp 2.

The supply of food at camp 2 finally hit bottom on 7 June and we faced a decision: go down to camp 1 for food or go up to the point where we had lifted our food and then go on toward the top. In the morning the heavy clouds which had covered the southern face of Mt. Logan began to clear out so we decided to take the latter course. Though visibility sometimes became poor the sky was clean. Getting to the food depot in three pitches we filled our rucksacks. We had to change our skiis to crampons because of ice slopes. Going across the windy western shoulder we reached the northern slope of Aina Peak. We climbed down to Aina Peak and farther along the slope of the plateau began to ascend on skiis again but the weather worsened, the snow storm finally depriving us of sight. At the third pitch it had become impossible to go forward any more so we dug a snow cave in the slope of the crevasse area. The −45°F temperature gave us pain; our contemplative faculty numbed, we became drowsy. Waiting for our turn with the shovel our breath turned into ice and stuck on our whiskers. In the snow cave we massaged our legs and feet but they still remained numb. Shimizu was frost bitten for the second time, his toes turning purple and blistering. Next day we set out again. While taking a rest visibility became very poor and we were forced to return to the snow cave. All of us were suffering from headaches, nausea, fatigue and poor appetite.

On 9 June we had very severe snow storms. With no food left we decided to climb down in the storm. The surroundings of nothing but snow deprived us of our balance and we often fell. Sometimes we became victims of an illusion, one of us stood still in a posture as if he had been skiing which made us laugh. When we finally got to camp 2 after midnight we were all exhausted.

At base camp we rested and reorganized, climbing to camp 3 again on 16 June. On 18 June we started at 7 a.m. Soon the ridges and then the high plateau were entirely covered with mist. Nonetheless we dared to continue as the supply of food and gas was very low and we could not afford to wait for another chance. Then the clouds over the ridges cleared away and the upper point of the high plateau appeared above the clouds. Until today every time we had come close to the top we had had bad weather and had been unable to tell which was Central Peak; we decided to climb up the highest peak in front of us.

Climbing along the ridge running down north from the peak the air around us shone brightly, a phenomenon called diamond dust caused by the floating crystallized ice shining in the sun light. The sun was surrounded by a seven colour rainbow and we felt as if we were walking on a planet somewhere far away from the earth. East Peak came into sight to the left. We reached the peak seen from below—another sharp peak appeared in front of us. On the sharp peak we saw no higher peaks around us and so concluded this was Central Peak. It was 10.15 a.m. During the 34 days since landing on the mountain we had had only seven fine days. Climbing under bad conditions was hard. The average temperature of −4°F., carrying equipment in bad weather, frost bite, mountain sickness were all far more severe than we had expected. Filled with joy at reaching the top we firmly shook hands with each other. Happy tears froze on our cheeks. Now clouds which had stayed in the north started moving and the top was an island floating on the clouds.

Immediately we started skiing down, beginning from the shoulder one step below as the top was a narrow knife edge, and heading obliquely toward the northern plateau. Turning back we could see the other two appear in the mist. We went on, smooth skiing down picking up a trail markers in turn. After a rest at Aina Pass we began to climb with great difficulty to Aina Peak. On top we found some AINA members. Skiing down to camp 2 there were no clouds. We had smooth skiing on soft snow. We broke camp 2 and made our way toward camp 1, again in clouds. The snow became much worse making us gasp for breath at each turn. At the crevasse area we took off the skiis and went carefully down to camp 1. Three days later we skied down to base camp.

On 23 June we started climbing King Peak from the west ridge but had to give up at 14,500 ft as we had spent most of our food and other equipment on Logan. On 30 June we landed on the green earth we had not seen for six weeks.

After returning to Japan we became doubtful about the peak we had ascended. A query to the Senshu Alpine Club in Osaka, who had traversed from the east to west ridges after our skiing down, revealed that we had mistaken the West Peak for the Central Peak. The day we climbed Central Peak was hidden in the clouds and we were unaware of its existence.

Keiji Shimizu

First reported in *Gakujin*, vol. 317, 1973.

The Columbia Icefield

"The view that lay before us in the evening light was one that does not often fall to the lot of modern mountaineers. A new world was spread at our feet; to the westward stretched a vast icefield probably never before seen by human eye, and surrounded by entirely unknown, unnamed, and unclimbed peaks." These are the words of Norman Collie describing the view, after he and Hermann Woolley had set foot on the summit of Mt. Athabaska, discovering the great Columbia Icefield which lay beyond. It was an August day back in 1898.

After toiling for hours we can see the two weary figures slowly approach the summit late in the afternoon (5.15 p.m.) and stand in wonderment at the view around them. To the west lay the great snowfield bathed in shadows of the late afternoon sun.

I would imagine that the view we now see from Mt. Athabaska is little changed, but the great snowfields' tributaries are receding at a phenomenal rate. For instance in a study by W. O. Field Jr. made on the Columbia Glacier, a tributary on the icefields' west side in 1948, Mr. Field estimated that the Columbia Glacier had lost in volume an astounding 11,000,000 cubic yards per year over the 29 previous years. This tells the story of what is happening in the last half century. Maybe a small icefield in comparison to other mountain ranges, such as the Coast, or St. Elias Range, but to the Rockies it holds a special charm.

Most tourists who bounce up the short track in snowmobiles on the Athabaska Glacier are amazed at the glaciers' magnitude but they are unaware of the secrets hidden beyond the headwall where the icefield sprawls out for miles in all directions.

On a map the icefield looks much like an octopus. The main mass of the névé sits on a high plateau between 8500 ft and 10,900 ft dipping slightly to the south. It rises like a blanket over 12,000 foot North Twin and 11,000 foot peaks such as Snowdome, Mt. Kitchener and Mt. Stutfield only to break off in huge ice cliffs above the high rock walls of these peaks facing away from the icefield. The summit of Snowdome is unique in that it is the hypographical apex of the Rockies, snows from its summit, melt and flow in three great river systems to the Pacific, Hudson's Bay and the Arctic Ocean.

Mountaineering parties gain access to the icefield usually by the Athabaska Glacier, most in late spring when skiis make for faster travel. In the past five years the great faces on the icefield peaks have attracted many expert climbers and some have been ascended by extremely difficult routes. Mt. Athabaska and Andromeda are the most popular peaks, for they are close to the highway and possess good snow and ice routes.

The north east side of the icefield. Ice cliffs drop over huge rock faces. Mt. Kitchener as seen from Mt. Stutfield. Mt. Athabasca at left *Glen Boles*

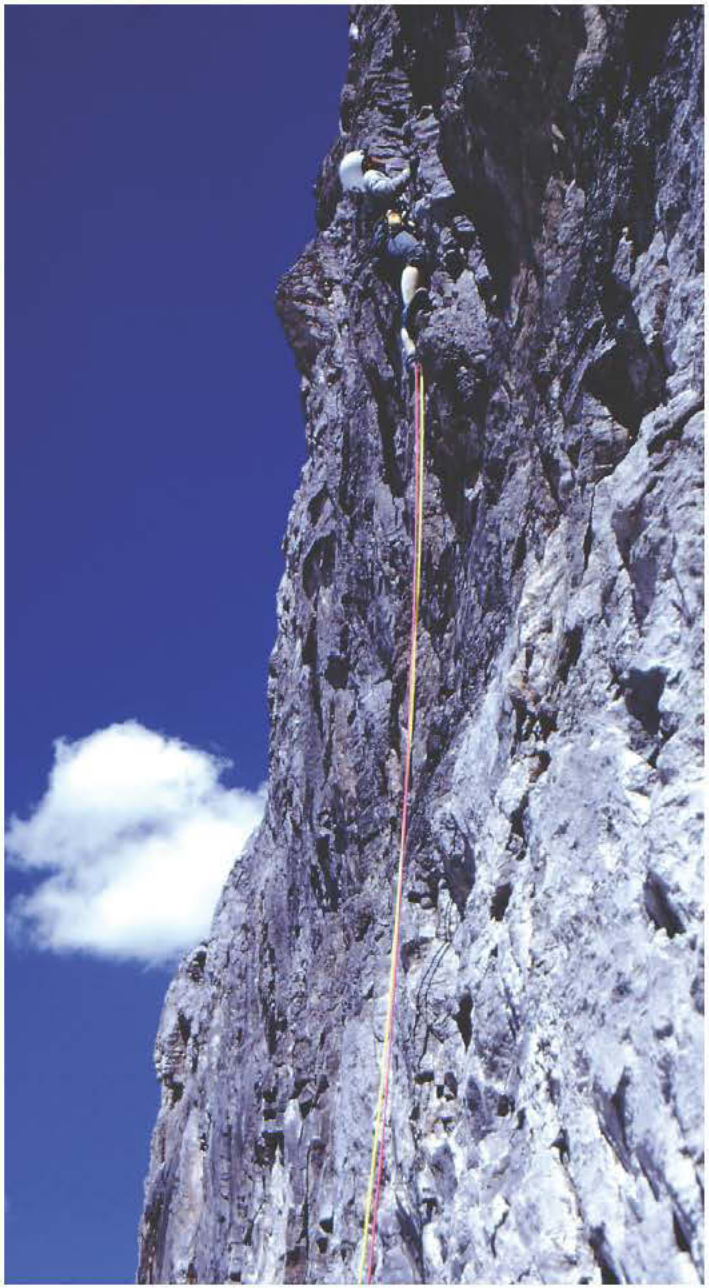
Twins Tower from summit of North Twin. The Athabaska River valley below to the north. A prime example of the escarpment on the north end of the icefield peaks *Glen Boles*

Canadian Rockies TEN PEAKS 登攀

モレーンレイク展望台からのテンピークス。当初の計画ではテンピークスの第1峰から第10峰までを縦走する予定であったが、岩稜の風化作用が著しく、岩が脆く、あまりにも危険を伴うため縦走を中止し、第1峰，2，3，4，5，6，7，9峰を個々に登攀した。（左より2，3，4，5，6峰）

7峰から下降し、ウエンクチュマナ・パスへ向かう途中に通過したプロスペクター・バレーの美しさに感動した。この谷間で出会ったのはトレッカー３人のみで、太古からの自然がそのまま残っている。Keep Canada Clean のキャチフレーズどうりゴミなど全く落ちてない。

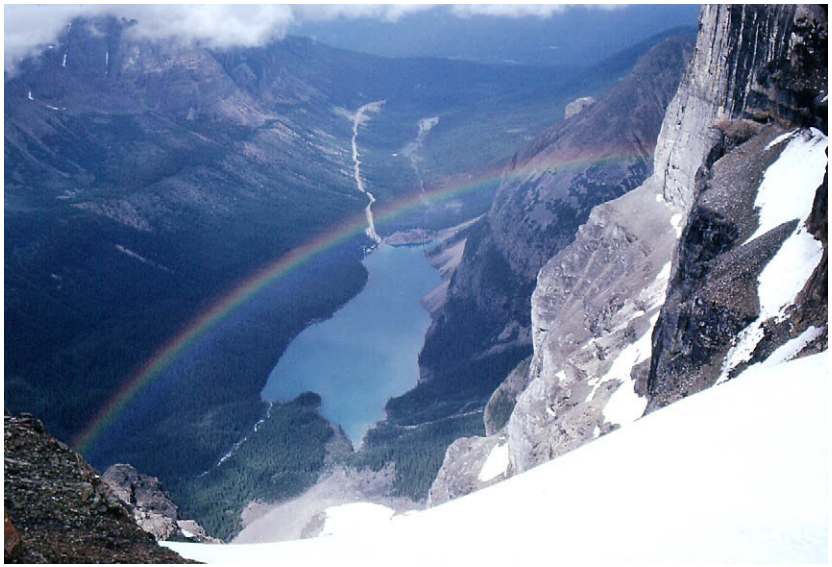
1峰へは氷河の条件を読み、登山の目的にあったルートを自由に選択すればよい。モレーンレイクより下部岩壁を登り、上部氷河を左にトラバースして、頂稜をたどってピークに達する。



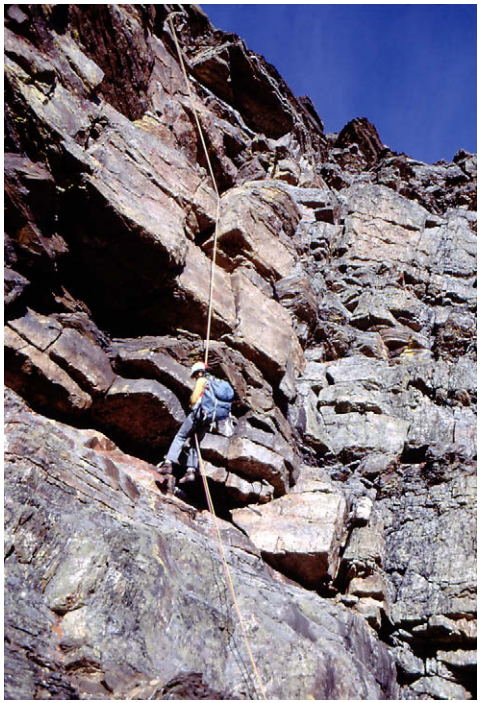
下部岩壁の最終ピッチはかぶり気味の岩壁で、40メートル1ピッチある。フリークライムⅥ級程度の難易度で、ハーケンは2本しか打てず、緊張するクライミングだった。

岩壁を越えると氷壁で、12本爪のアイゼンが気持ちよく効き、高度をかせぐ。

岩壁を越え、傾斜のゆるい上部氷河をぬけ、3、4のコルにあるグラハムクーパー避難小屋へ向かう。1峰へは上部氷河を大きくトラバースし、左手の稜線よりつめる。下山は右のコルより氷壁を下降した。



雪まじりの悪天候のため避難小屋で停滞。夕方、天候が回復し、眼下のモレーンレイクに美しい虹が架かった。



谷間には色とりどりの高山植物が咲き乱れていた。

９峰の南壁を下降する。クライムダウンと40メートルいっぱいの懸垂下降を４回くり返す。水成岩でできた岩壁は風化が激しく、長いアイスハーケンの支点も引き抜けそうで、あまり良い気分ではなかった。

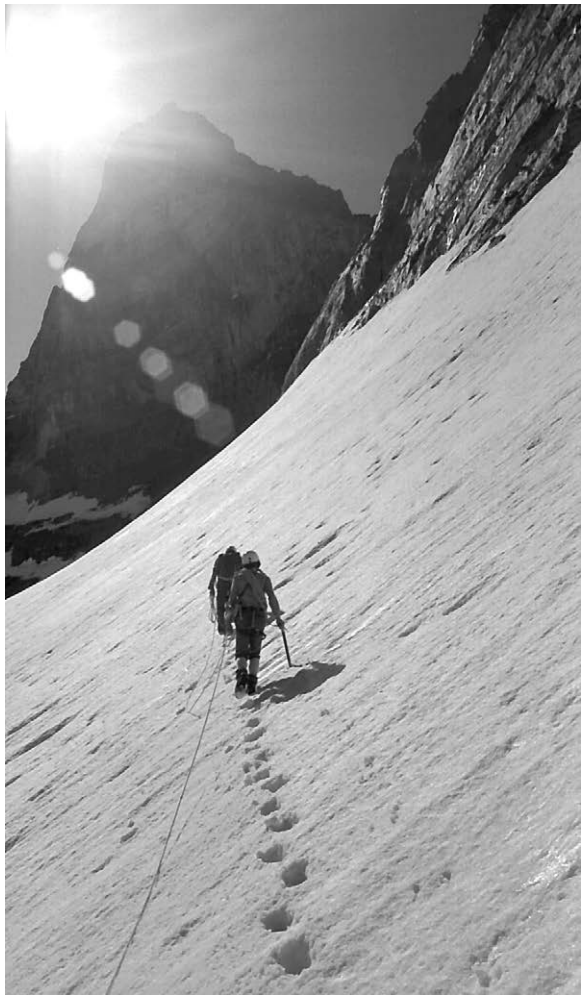
9峰の北側は標高差1000メートル程のすっきりした岩壁。右手の岩稜を登攀。ここのキャンプサイトは大らかな雰囲気で気分がよい。　(左より7，8，9峰)

モレーンレイク上部のウエンクチュマナ氷河はモレーンのみの氷河地形で、テンピークスを展望しながらのトレッキングには最適のコースだ。　(左より1〜7峰)

1峰から北側へ派生している氷まじりの岩稜を行く。
山頂より舌の形をした氷河が2本下りている。

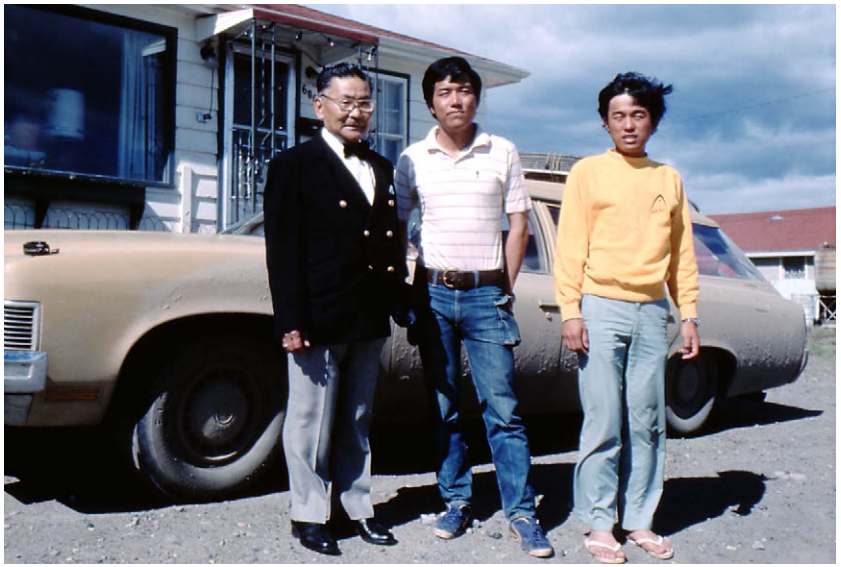
1峰上部の氷壁を登行する。この部分は北西に面しており夕方しか陽があたらないため、アイゼンの爪がよく効く。

7峰の下降　上部の氷河を下り、下部岩壁は懸垂下降する。別天地のようなお花畑を通り、眼下に見えるカウフマンレイクへ下る。



9峰の登攀　雪壁をトラバースし、右手の岩稜をまわり込み、正面の9峰から北西にのびる岩稜をつめ山頂に至る。

忘れえぬ人々



ユーコン州ホワイトホース在住の日系二世のC.J.マガミ氏（故人）。ローガン登山では親身になってお力添えをいただき、忘れがたい人柄であった。

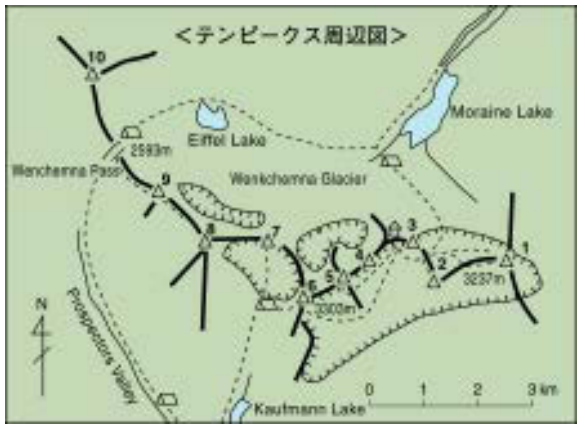
ユーコンで最も腕利きのヘリコプターパイロット、ボブ・ダンバーとその家族。予備スキーと引き替えにフライト費用をディスカウントしてもらう。

ローガンのカナダ隊々長のフューラー氏の自宅を訪ねる。ジャスパー国立公園のレンジャーとして活躍している。

レイクルイーズの奥にあるティーハウス。26年後、斉藤が家族と再訪すると、この姉妹は女主人としてカフェを切り盛りしていた。

アラスカ・カナダ　スキー登山隊　行動概要

5月2日　東京羽田発
5月2日　バンクーバー着
5月3日　食糧買い出し、レンタカー交渉
　〃
5月5日
5月6日　バンクーバー発
　〃　　アラスカ・ハイウェー北上
5月10日 ホワイトホース着
5月11日 ユーコン州政府に入山届提出
　　ヘリコプター・チャーター交渉
　〃　　別送品通関手続き
　　食糧買い出し
5月14日 物資梱包
5月15日 ヘインズ・ジャンクション着
　　山岳アドバイザーグループにて装備・食糧の点検。極地研究所にて無線機を借用。高林、斎藤は物資の半分と共にバーウォッシュ・ランディングに移動。大久保、清水はヘインズ・ジャンクションに戻る。
5月16日 大久保、清水はヘインズ・ジャンクションよりマウント・ローガンへヘリコプターで飛行し、3360mに着陸。第二回目の飛行で高林、斎藤はバーウォッシュ・ランディングより入山。
　　ベースキャンプ建設。
5月24日 第1キャンプ（キングコル 4200m）建設
5月31日 第2キャンプ（4570m）建設
6月7日　第2キャンプより登頂に出発し、山頂まであとわずかまで接近するが、悪天候となり、5640m地点まで引き返し雪洞（第3キャンプ）を掘る。
　　この時、気温は－43℃まで下がる。
6月8日　再び山頂に向かうが、悪天候になり第3キャンプへ戻る
6月9日　食糧・燃料切れのため、暴風雪の中を第2キャンプへ下山
6月10日 第1キャンプへ下山
6月11日 高林、斎藤はベースキャンプへ食糧等の補給に往復
6月12日 第2キャンプへ登る
6月16日 第3キャンプへ登る
6月18日 つかの間の晴れ間を狙い午前10時15分マウント・ローガンへ全員登頂。10数分で視界が悪化し、早々に山頂よりスキー滑降を開始。第3・第2キャンプを撤収して第1キャンプまでスキー滑降。
6月21日 スキー滑降にてベースキャンプ着
6月23日 キングピーク西稜登攀開始。4270m地点に雪洞を掘る。
6月25日 キングピーク西稜の4420m地点まで登攀するが、日数不足のためベースキャンプへ下降。
6月30日 ベースキャンプよりヘリコプターでヘインズ・ジャンクションに下山。
7月1日　ホワイトホース着
7月2日　装備の発送、その他後片付け
　〃
7月4日　高林、空路バンクーバーへ向う（7月11日帰国）
7月5日　アラスカへ休養もかねてドライブ
　〃
7月11日 ホワイトホースに戻り、それよりカナディアン・ロッキーに向けアラスカ・ハイウェーを南下
7月16日 バンフ着
7月17日 テンピークス入山
7月18日 ウェンクチュマナ・パスへ荷上げ
7月19日 第2・第3峰間より稜線に登りグラハムクーパー避難小屋へ入る（これよりこの小屋を基地に第1峰から第5峰まで登攀）
7月20日 第1峰登攀
7月22日 第2、第3峰登攀
7月23日 第4、第5峰登攀
7月24日 第6峰登攀
7月25日 第7峰登攀。プロスペクターバレーに下降。
7月26日 ウェンクチュマナ・パス
7月28日 第9峰登攀。第8、第10峰は岩が脆く危険なため登攀を中止。
7月29日 モレーン・レイク着
7月30日 バンフへ下山
8月1日　カルガリーにて休養
　〃
8月3日
8月4日　バンクーバーへ向け出発
8月6日　バンクーバー着
8月8日　サンフランシスコ着
8月11日 清水、帰国（成田空港）
8月18日 大久保、斎藤はアメリカ西海岸を見学し、帰国



“老眼スキー登山隊”メンバー　アッという間の30年を振り返る

ローガンから３０年

大久保　善雄

中学2年、14歳で初めて3000ｍの北岳に登ってから41年たち、やっと2003年5月３日に千丈岳に登り、大千丈沢をスキーで滑降して日本の3000mを全部登り終えました。

1973年のテンピークス以降、岩登りはしていませんがスキーは続け、子供達3人とも背負ってスキーに出かけました。
40歳半ばから子供達と行く家族スキーの他に、残雪期の山スキーを再開し、鳥海山、月山、吾妻山、会津駒ケ岳、平が岳、至仏山、火打山、四阿山、乗鞍岳などを滑り頑張って楽しんでいます。
だけど！！！　思い返して見ると、ローガンでスキー登山をする前に何処へ行ったっけ？？？

山岳部の合宿の延長が、キングピークの雪稜登攀やテンピークスの岩登りそのものだったが、スキーは卒業直前の3月から始めたゲレンデスキーがなんとかさまになり、山スキーは剣沢や立山、八方尾根くらいしか体験しておらず、ザイルを繋いでのスキーは、岡本さんの住んでいた白樺湖のスキー場で少し練習しただけの、スキー歴３年めの大冒険だった。
ローガンでは胸までの新雪をアンザイレンしたまま滑れたので、スキーが少し上手くなった気がしていましたが、帰国後、上越の足首ほどの積雪にさんざんてこずり、実力のほどを知りました。
車の免許も初心者のままで、雪解けの砂利道のアラスカハイウェーでスピンし、タイヤをバーストさせるほどの腕前でした。

忙しいなか会社を3ヶ月も休み、帰国後、同僚の冷たい視線に耐えしのぎながらも早々に結婚し、3人の教育費（後一人）もやっと終わりに近づき、孫も二人生まれましたが、人生まだまだこれからです。
いまだに山とスキーの関係の仕事ができ、何とか生活できているのも、ローガンが出発点だったと今にして思いますが、確実に老眼になりました。

山スキーも車の運転もかなり上達しましたが、体力は下山中です。せめて水平歩行を続けられるようにしたいものです。

「勇気」をもらった山行

清水 敬示

この山行を計画推進した原動力は、自分の生まれてきた意味を知りたいという欲求であった。その当時、私は何のためにこの世に生まれ、何をしたらよいのか、簡単には答の出ない迷路に入り込んでしまっていた。それで、元気を取り戻すためには、山にこもり、自然の中に身をおき、体を通して考えることが良いと思った。Mt.Loganの計画は国内の山行とは異なり、「出発」できるかがキーポイントであった。約１年ほどの準備期間の前半は常に綱渡りの連続であり、孤独でもあった。多くの人々の暖かい支援に支えられ、出発の１週間前にようやく資金の目処がつき、１つ目のハードルを越えることが出来た。

ヘリコプターで入山してからは、いつもの山行のように各メンバーが役割分担をきちっとこなしてゆけば、登山計画は前進していった。１回目のアタック敗退以降、ある種の一体感が４人の中に芽生えはじめた。それは、チームそのものが１つの生命体のような感じがするのである。４人はそれぞれの個性をもった別の人格であるが、有機的に統合した生命体のような１つの意識を共有していた。これは今までに体感したことのない不思議な感覚であった。

40代半ばを過ぎたころ、不覚にも大病を患ってしまった。入院中の臨死体験は、ローガン山頂直下のダイヤモンドダストの中で感じた不思議なものと、全く酷似していた。その至福感は、けっして日常では味わえるものではなく、意識は限りなくクリアーな世界であった。肉体はこの世に生まれてくるための仮の姿であり、精神（スピリッツ）は時間・空間を超越したものであることを、そのとき確信した。

勇気をもって決断し、自分を信じ、諦めないで行動し続ければ願いは必ず成就することを、この山行は教えてくれた。カナダの山旅から帰国後、それまで学んできた「造船」から陸に上がり、気持ちよい居住環境づくりを目指して「建築」を志すことにした。ここ数年、伝統的住生活の知恵と現在のテクノロジーを融合させ、住まいの内外を夏涼しく冬暖かい、心地よい微気候を形成させる「微気候デザイン」という手法を確立し、その啓蒙普及をライフワークにしている。それは30年前に多くの人々に支えられ、貴重な体験をさせていただいたことへの恩返しであると考えている。

夢と仲間

高林　潔

久しぶりに写真や岳人の記録などをみた。高度障害で苦しんだこと、強烈なブリザードや氷点下30～40度の世界、遭難寸前だった第１次アタックの敗退、登頂成功の喜びとスキー滑降などは、不思議と別の世界の出来事であったように感じられる。

むしろ、飛行機が離陸した時の感動、バンクーバーの美しい町並み、アラスカハイウェーのドライブや道中の珍事件が昨日のことのように思える。それは、私がしばらく山から遠ざかっているせいかもしれない。

清水と富士山の頂上からスキーで滑るなんてホラを吹いたのが、Mt.Loganのきっかけだったような気がする。富士山のスキー滑降は、氷化した急峻な斜面を落ちてゆくようなものであった。なんとか成功し、その下山中にどちらかともなく、次は海外の山のテッペンから滑ろうと夢を語った。

夢を現実にすることでは名プロデューサーである清水が動きだした。隊長は、何事にも「平気だよ」と楽観的なようで、実は緻密で妙なリーダーシップがある大久保さん。隊員の中では後輩であるために、時々ブツブツ文句を言いながらも確実に実務をこなす齋藤君。そして、なんとなく皆についていった、どちらかというとムードメーカー（いやトラブルメーカーか）の私。４人の素晴らしい仲間が揃った。

あれから30年。酒をこよなく愛するヨッチャン隊長は孫２人、大病を克服し仙人のような風貌の清水、資金繰りの苦労を競馬で解消している齋藤社長、そして趣味に生きる極楽トンボの私。長い付き合いである。

不思議に仲間と合うと、暗黙の了解でお互いの役割ができ、また、付かず離れずのここちよい関係が続いている。その仲間も中年から初老へ。セカンドライフは、Mt.Loganでのあのエネルギーを思い出し、豊かで楽しいものにしたいものである。

そして、素晴らしい仲間を大事な宝物として大切にしたい。

Mt.Logan―「夢と仲間」をありがとう

親父　先輩　家族

齋藤 純一

卒業後に家業を継ぐ約束で、日本山岳会学生支部の海外登山に行かせてもらった。この登山中に清水先輩からMt.Loganへの参加要請の手紙がきた。遠征参加資金のことは心配するな、と内容があったような気がする。カナダの山旅から帰国してすぐ、親父に「来年もまたカナダの遠征に参加したい」とはなかなか言い出せず、悶々としていた。カナダ最高峰からのスキー滑降の計画は具体的に動き出し、返事をしなくてはいけない時期に来ていた。

「親父、先輩から海外遠征隊員になれって言われてんだけど.....。一年遊ばせてもらう約束が少し伸びちゃうんだけどさあ.....」。しばし親父は僕の目を見ながら考えていた。ややあって、「純一、先輩から声が掛かったんじゃ行かねえ訳にいかんだろう。お前、行って来い！」と結論が出た。ところが遠征資金免除の約束は、なにもなかったように各自分担になった。そんなわけで、僕はまた、親父のすねをかじることになった。

第３キャンプからの敗退は、今までに体験したことのない世界だった。ホワイトアウトと高度障害のため、平衡感覚が狂ってしまい、恐ろしい思いをした。暴風雪のなかを滑降中、雪崩に巻き込まれたような衝撃が体をおそった。「ナダレダーッ！ナダレダーッ！」と叫びながら必死で雪の中をもがいていた。

「斉藤！大丈夫か！」「おい、斉藤！」と声が聞こえ、先輩たちが僕を取り囲んでいた。ほっと安心したのもつかの間、第２キャンプへの遠い道のりはまだ始まったばかりだった。

無事第１キャンプまで下山した翌日、「齋藤！たばこあるか」。「ヤバイ！ベースキャンプにおいてきました」。「じゃ、回収だ！」。高林先輩の強引な一言で、大事な休養日が取り消しになった。疲労と脱水状態で、無事にタバコを回収して第１キャンプに戻ったときは、さすがの大久保隊長も呆れたような顔をしていた。その、大久保先輩とは、今でも仕事の関係でお付き合いしている。

５年前、家族を連れてカナダを旅した。バンフからちょっと入ったところにあるレイクルイーズの奥に、夏だけ開いているティーハウスまでハイキングをした。当時５～６才の可愛い娘さんは、女主人になっていた。お世話になった御礼に置いてきたスキーは、暖炉の上の壁にそのまま掛けてあった。息子に僕の若いころの体験を話すことも出来たし、２年続けて山に行かせてくれた親父の気持が分かったような気がした。ローガンは人の繋がりの大切さを教えてくれたようだ。

ご支援をいただいた企業・団体・個人名リスト

アラスカ・カナダスキー登山隊は、多くの方々の暖かいご支援によってその計画を達成することが出来ました。ここに限りない感謝と友情の気持ちをこめて、記憶にとどめたいと思います。

（順不同、敬称略）

ホープ株式会社	松前 達郎
日本交通公社	尾郷 良幸
カナダ太平洋航空会社	柳澤 三郎
東京新聞出版局「岳人」	五條 吉和
株式会社日本シリコーン商会	
山幸	岡本 龍行（故人）
森永製菓株式会社	直江 亨 （故人）
味の素株式会社	永田 壮三
エスビー食品株式会社	足立 允
丹渓	湯本 鐐三
尾西食品株式会社	松田 宗一郎
太洋漁業株式会社	石井 宣夫
三井物産株式会社	高橋 誠二
マミヤ商事株式会社	原 雄二郎
株式会社ザンター	福田 俊夫
	小川 博久
The Alpine Club of CANADA	鈴木 政孝
Government of The YUKON TERRITORY	中村 武夫
MITSUBISHI CANADA Limited	落合 公生
HERZ Rent a Car	三浦 藤夫
Trans North Turbo Airlines	蓬莱 泉雄
Bob Dunber	和田 博文
C. J. Magami（故人）	長浜 道広
	佐々木 富雄
東海大学同窓会	大野 安彦
東海大学後援会	
東海大学教育研究所	大久保 孝則
東海トラベルビューロー	錦織 秀雄
東海大学体育会	文部省登山研修所　伊藤 茂
東海大学体育会山岳部 OB 会	日本山岳会　吉沢 一郎

費　用

計画実施にあたり、登山隊の会計帳簿の中で動いた金額は下記のとおりですが、これ以外に相当数の物資の支援や、惜しみない人的エネルギーのサポートが多数あったことを明記しておきます。金額に換算できるものだけを試算してみても、それは総費用の２倍を越える金額に達していました。

1973年のオイルショック当時、都心から１時間以内の場所で、50坪の土地に30坪程度の建て売り住宅物件は、1100～1200万円ほどで購入することが出来ました。ちなみに１$ は300円の頃でした。

○費用	渡航費	1,040,000-
	滞在費	500,000-
	交通費	250,000-
	装備費	300,000-
	食糧費	200,000-
	輸送費	250,000-
	ヘリコプター費	450,000-
	渉外費	150,000-
	記録費	200,000-
	医薬品費	60,000-
	諸雑費	75,000-
	合計	￥3,475,000-
○収入	寄付金収入	1,450,000-
	雑収入	55,000-
	個人負担（４人）	1,970,000-
	合計	￥3,475,000-

表紙写真：パウダースノーの斜面を快適に飛ばす（アイナピークの南西斜面5500ｍ付近）。後方はセント・エライアス山脈中最大のセワード氷河をはさんで右手にマウント・セントエライアス、左側マウント・オーガスタの後方にはアラスカ湾が遥かにのぞまれる。

若き日の夢は、多くの人々に支えられ実現しました。私たちの想いと暖かい支援が連鎖し、大きなエネルギーとなり、勇気と希望を与えてくれました。

その後、４人は社会に戻り仕事をこなし、家庭をもち、子育てをしながらこの時の気持ちを大切にして10年、20年と走り続けてきました。お陰様で一人一人充実した人生を心がけ、歩んで来ることができました。

30年の節目を迎えるにあたり、何か目に見えない大きな力に支えられた青春期の１シーンを振り返り、これからの人生をどう生きてゆくかを考えるため、記念誌を作りました。

登山隊メンバー　大久保 善雄
清水　敬示
高林　潔
斉藤　純一

編集担当　清水　敬示
連 絡 先　164-0003　東京都中野区東中野 1-16-1
Tel／Fax　03-3363-7136
発　　行　2003年６月